

# 関西学院大学における中国語初年次教育の総括と 拡充に関する実践研究報告

——教材開発、及び早稲田大学文学部における試みとの対比——

成 田 静 香（文学部・研究代表者）

藤 野 真 子（商学部）

西 村 正 男（社会学部）

田 禾（経済学部）

韓 燕 麗（経済学部）

大 東 和 重（法学部）

## 要 旨

本報告では、2012年度関西学院大学高等教育推進センター共同研究助成「関西学院大学における中国語初年次教育の総括と拡充——カリキュラム・教育プログラム・教材研究の相関性から」（研究代表者は成田静香）の成果を報告する。本学の中国語初年次教育では、学生が生の中国語に触れる機会を増やし、また全学で高い水準の授業を提供することを目的として、中国語ネイティブ教員と日本語教員がペアを組み、共通教科書を用いて授業を行っている。だが、ペアワークの機能の方向性や、共通教科書のクオリティなどにおいて、改善が必要との認識を教員が共通して抱いていた。一方、早稲田大学文学部では、コンピュータ学習を中国語教育に導入、高い教育効果をあげていることを知り、いかなる試みがなされているのかについて強い関心を抱いていた。

2012年度は、共同研究助成を得て、本学の専任教員が週に1回程度、教科書作成のために会議を開く機会を利用して、教科書の作成に従事するのみならず、初年次教育の総括と拡充について検討を重ねることができた。また、早稲田大学文学部の新しい試みについて、著名な中国語学・中国語教育学者である楊達教授を招き、学外の成果を本学の教育に反映させることを目的とした講演会を開くことができた。講演後には本学の教員と初年次教育のあり方について研究交流を行った。

本報告では、以上の教科書作成、新たなカリキュラムに向けての検討、及び講演の成果をまとめた。前半は、本学における中国語初年次教育の現状を説明、新たな教科書作成の経緯について紹介し、また今後の拡充に向けての展望を行った。後半では、楊達教授の講演の記録を掲載した。

## はじめに

海外の新しい文物が流入し、また世界的に見ても大規模なチャイナタウンを擁する港湾都市・神戸から近い本学の立地は、日本全国に対してのみならず、広く中国・台湾・香港といった東ア

ジア地域へ向かって教育・研究の情報を発信する上で、絶好の地理的条件に恵まれている。将来の関西地域の経済的・文化的発展は、東アジア地域との連携なしには考えられず、本学にはそれを支える人材を育成し、研究の拠点としての機能を果たす責務がある。

本研究は、東アジアで活躍する人材を育成する一助として、本学における中国語初年次教育の現状を総括するとともに、その一層の拡充を目指して、新たな教材やカリキュラム、教育プログラムの研究開発を進めるものである。中心としたのは、2010年度から開始した、新たな教科書作成の作業である。週に1回程度の会議を開き、本学のカリキュラムをより十全に発揮する教材の研究開発に取り組んだ。この教科書作成の会議の際には、中国語教育の一層の拡充を目指して、新たな教育プログラムを研究・検討するなどした。また、早稲田大学文学部で進められている、コンピュータ学習を中心とした中国語教育の成果について知るために、早稲田大学文学部の楊達教授を招いて講演会を開催、本学における取り組みとの比較検討を行った。

なお本研究は、「中国語初年次教育」を主たる対象とするが、8単位に相当する時間数の中で、中国語の基礎を習得させることを考慮すると、2年次の教育を切り離すことはできない。よって、2年間8単位の教育内容を総合的に考慮していることをお断りしておく。

## 1. 本学の中国語初年次教育の現状

まず本学の中国語初年次教育の現状について簡単に説明する。

本学では、文・社会・法・経済・商・総合政策・人間福祉・教育の計8学部で、共通したカリキュラムに従い中国語科目を提供している（総合政策学部以外の7学部は選択必修科目）。1、2年次それぞれ4単位、計8単位の授業を、日本人とネイティブの教員がペアを組み、連携して教えるという、全国的に見ても進んだシステムを採用している。その主要な目的は、学生に生の中国語に大量に触れてもらうという点にある。このカリキュラムのおかげで、他大学と比較して学生の発音は顕著な改善を見せていると思われる。科目名は「中国語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」で、また3年次以上の学習者のために発展科目として「中国語中級」を設けている。

また、教材については共通教科書を用いて、いずれのクラスにおいても一定水準の授業を提供できるよう工夫している。2011年度まで使用していた、于康・成田静香・大平幸代編『中国語プライマリー1・2』（好文出版、2004年）は、ペア授業での使用を念頭に置いて作成した教科書で、本学で長く使用してきた。

しかし2010年、中国の教育部が認定する、主に中国留学を目指す学習者向けの中国語検定試験HSK（漢語水平考試）が大きく変更された。本学には、交換留学や短期語学研修、私費留学など、各種の手段を通じて中国や台湾等への留学を希望する学生が多く在籍する。特に長期留学の希望者には、HSKの新しい基準を踏まえた、新たな教材を提供する必要がある、これが近年の課題であった。また、ネイティブと日本人講師のペア授業の効果を、これまで以上に発揮できる教科書を作成する必要もあった。

以上の、本学の先進的な中国語初年次教育のカリキュラムをふまえて、新たな教育プログラムを研究し、教材を研究開発することを目的に、本学の中国語教員は、4年計画の共同研究を進めてきた。2010年から開始された本共同研究において、2012年度は3年目であった。

新たな教科書作成は、中国語初年次教育を改善する上で中心的な課題であり、週に1回程度、

3 時間ほどの長時間の会議を開いて進めてきた。その一方で、会議においては教科書作成のみならず、本学の中国語初年次教育の現状を総括しつつ、今後の拡充を目指して、教授法などについて討議する機会をしばしば設けた。2012年度には本研究助成を得て、教科書作成の面で大きく前進を見たのみならず、より充実した報告と討議を進め、さらに収穫の多い講演会を開催することができた。

具体的には、2012年度、学期中 1 ～ 2 週間に 1 回程度の会議を開き、

1. 教材の研究開発の一環として、教科書試行版の修正・完成版作成を進める
  2. 本学の中国語カリキュラムについての検討を引き続き進める
  3. 中国語学・教授法等と関連する情報の収集と分析・共有を図り、新たな教育プログラムを研究する
  4. 他大学の教育の現状と優れた取り組みを知るために、講演会を開催する
- の 4 点の活動を行った。

## 2. 本学の中国語教育の改善に向けて 1 ——教材開発

本共同研究のメンバーが新しい教材の研究開発を開始したのは、2010年度からである。まず、研究代表者・共同研究者のうち大東を除く 5 名は、2010年度から、現在のカリキュラムにもとづき新たな教育プログラムと教材の研究開発に着手、まず 1 年次の教科書作成を 3 年計画で進めることとし、試行版を作成、2011年度から実際に授業で使用した。2011年度は、新任の大東も参加して計 6 名で、1 年次の教科書試行版の修正を行いつつ、同時に 2 年次の教科書作成に 3 年計画で着手、2011年度に試行版を作成し、2012年度から使用した。

2012年度には、1 年次の教科書に対し引き続き修正を加える作業を行った。2013年度からは、正式出版された『いつでも中国語—随时随地学汉语—1』（朝日出版社、2012年）を使用している。一方、2 年次の教科書の修正は、2012年度、さらに現在2013年度も継続して行っている。2014年度からは、『いつでも中国語—随时随地学汉语—2』（朝日出版社、2014年刊行予定）を正式出版、使用予定である。

つまり、すでに2010・11年度には、

- ・ 1 年次用教科書の試行版、『KG で学ぶ中国語 1』の作成
- ・ 1 年次用教科書の改訂版、『KG で学ぶ中国語 1 〈改訂版〉』の作成
- ・ 2 年次用教科書の試行版、『KG で学ぶ中国語 2』の作成

の作業を済ませており、よって2012年度は、

- ・ 1 年次用教科書の完成版、『いつでも中国語—随时随地学汉语—1』の作成
- ・ 2 年次用教科書の改訂版、『KG で学ぶ中国語 2 〈改訂版〉』の作成

を行った。

『KG で学ぶ中国語 1 〈改訂版〉』及び『KG で学ぶ中国語 2』を、実際に授業で使用しながら、並行して会議を開き、内容の検討を行った。語彙については、HSK 1 ～ 3 級、中国語検定試験準 4 級 ～ 2 級の語彙を基本語彙と位置付けた。中国語検定試験は日本国内の検定試験だが、HSK は広く世界で実施されている検定試験である。HSK 日本実施委員会は、HSK の 1 ～ 3 級を次のように位置付けている。

1 級	中国語の非常に簡単な単語とフレーズを理解、使用することができる。大学の第二外国語における第一年度前期履修程度。
2 級	中国語を用いた簡単な日常会話を行うことができ、初級中国語優秀レベルに到達している。大学の第二外国語における第一年度履修程度。
3 級	生活・学習・仕事などの場面で基本的なコミュニケーションをとることができ、中国旅行の際にも大部分のことに対応できる。

また、1～3級の語彙とされているのは、下の600語である（下線については後述）。

A	阿姨 啊 矮 爱 爱好 安静
B	八 把 爸爸 吧 白 百 班 搬 半 办法 办公室 帮忙 帮助 包 饱 报纸 杯子 北方 北京 被 本 鼻子 比 比较 比赛 必须 变化 表示 表演 别 别人 宾馆 冰箱 不客气 不
C	才 菜 菜单 参加 草 层 茶 差 长 唱歌 超市 衬衫 成绩 城市 吃 迟到 出 出现 出租车 厨房 除了 穿 船 春 词语 次 聪明 从 错
D	打电话 打篮球 打扫 打算 大 大家 带 担心 蛋糕 但是 当然 到 地 的 得 灯 等 低 弟弟 地方 地铁 地图 第一 点 电脑 电视 电梯 电影 电子邮件 东 东西 冬 懂 动物 都 读 短 段 锻炼 对 对不起 多 多么 多少
E	饿 而且 儿子 耳朵 二
F	发烧 发现 饭馆 方便 房间 放 放心 非常 飞机 分 分钟 服务员 附近 复习
G	干净 敢 感冒 刚才 高 高兴 告诉 哥哥 个 给 跟 根据 更 公共汽车 公斤 公司 公 园 工作 狗 故事 刮风 关 关系 关心 关于 贵 国家 果汁 过去 过 还 还是 孩子 害怕 汉语 好 好吃 号 喝 和 河 黑 黑板 很 红 后面
H	护照 花 (v) 花园 画 坏 欢迎 还 环境 换 黄 回 回答 会 会议 火车站 或者
J	机场 鸡蛋 几乎 机会 极 几 记得 季节 家 检查 简单 件 健康 见面 讲 教 角 脚 叫 教室 接 街道 结婚 结束 节目 节日 姐姐 解决 借 介绍 今天 进 近 经常 经过 经理 九 久 旧 就 举行 句子 觉得 决定
K	咖啡 开 开始 看 看见 考试 渴 可爱 可能 可以 刻 客人 空调 口 哭 裤子 块 快 快乐 筷子
L	来 蓝 老 老师 了 累 冷 离 离开 里 礼物 历史 脸 练习 两 辆 了解 邻居 零 六 楼 路 旅游 绿
M	妈妈 马 马上 吗 买 卖 满意 慢 忙 猫 帽子 没 没关系 每 妹妹 门 米 米饭 面 包 面条 明白 明天 名字
N	拿 哪 (哪儿) 那 (那儿) 奶奶 南 男人 难 难过 呢 能 你 年 年级 年轻 鸟 您 牛 奶 努力 女儿 女人
P	爬山 盘子 旁边 胖 跑步 朋友 啤酒 便宜 票 漂亮 苹果 葡萄 普通话
Q	七 妻子 其实 其他 骑 奇怪 起床 千 铅笔 钱 前面 清楚 晴 请 秋 去 去年 裙子
R	然后 让 热 热情 人 认识 认为 认真 日 容易 如果
S	三 伞 商店 上 上班 上网 上午 少 谁 身体 什么 生病 生气 生日 声音 十 时候 时间 使 是 世界 事情 手表 手机 瘦 书 舒服 叔叔 树 数学 刷牙 双 水 水果 水 平 睡觉 说话 司机 四 送 虽然 岁 所以
T	他 她 它 太 太阳 糖 特别 疼 踢足球 题 提高 体育 天气 甜 条 跳舞 听 同事 同学 同意 头发 突然 图书馆 腿
W	外 完 完成 玩 碗 晚上 万 忘记 喂 为 为了 为什么 位 文化 问 问题 我 我们 五

X	西 西瓜 希望 习惯 洗 洗手间 洗澡 喜欢 下 下午 下雨 夏 先 先生 现在 香蕉 相信 同 相信 想 向 像 小 小姐 小时 小心 笑 校长 些 鞋 写 谢谢 新 新闻 新鲜 信 星期 行李箱 姓 兴趣 熊猫 休息 需要 选择 学生 学习 学校 雪
Y	颜色 眼镜 眼睛 羊肉 要求 药 要 爷爷 也 一 衣服 医生 医院 一定 一共 一会儿 一样 以后 以前 以为 已经 椅子 一般 一边 一起 一直 意思 阴 因为 音乐 银行 应 该 影响 用 游戏 游泳 有 有名 又 右边 鱼 遇到 元 远 愿意 月 月亮 越 云 运 动
Z	在 再 再见 早上 怎么 怎么样 站 张 长 丈夫 着急 找 照顾 照片 照相机 这 (这 儿) 着 真 正在 知道 只 中国 中间 中午 终于 种 重要 周末 主要 住 祝 注意 准备 桌子 字 字典 自己 自行车 总是 走 最 最近 昨天 左边 坐 做 作业 作用

以上、及び中国語検定試験準4級～2級の語彙に基づいて、『KGで学ぶ中国語1〈改訂版〉』及び『KGで学ぶ中国語2』を見直し、その際、HSK4級以上の語彙の使用を抑え、基本語彙中で採られていなかったものを追加する、という作業を行った。

4月～9月には、合計13回の研究会を開き、主に1年次用教材の検討を行った。『KGで学ぶ中国語1〈改訂版〉』は、すでに1年間（2011年度）の試行期間を経て改訂を行ったものであり、基本構成には問題がないものの、授業時間に比して練習問題がやや多いと総括した。それを踏まえ、一部練習問題を割愛し、また文法に関する例文を見直し、基本語彙を補充した。2012年末には、『いつでも中国語—随时随地学汉语—1』として公開した。

10月～2月には、合計12回の研究会を開き、主に2年次用教材の検討を行った。『KGで学ぶ中国語2』は、300字程度の文章の内容を大まかに把握し、朗読できるようにすることを目指したものであったが、授業形態に合っていないと総括し、内容の大幅な改編を行った。それを2013年3月に『KGで学ぶ中国語2〈改訂版〉』として出版した。

語彙に関しては、『いつでも中国語—随时随地学汉语—1』と『KGで学ぶ中国語2〈改訂版〉』で、上の600語のうち、下線を付した語を除く、439語（約73%）を収録するものとなった。難度の高い語彙を減らし、初年次教育の教材としてよりよいものになったと考えている。

### 3. 本学の中国語教育の改善に向けて2——早稲田大学文学部における試みとの対比

共同研究のメンバーである田禾は中国語学の専門家であり、かねてから早稲田大学文学部では、中国語学・中国教育学の専門家である楊達教授を中心に開発した、コンピュータを用いた新たな教育法を実施し、画期的な成果を見せている、との情報を得ていた。本共同研究のメンバーは、本学のカリキュラムを改善する上で、他大学における成功事例を参考にしたいと考え、楊達氏に早稲田における試みを本学にて講演していただくことを依頼、快諾を得た。

2012年11月24日、楊達氏（早稲田大学文学部教授・同大学中国語教育総合研究所長）を招き、「中国語初年次教育について——早稲田大学における試み」と題する報告をしていただいた。早稲田大学文学部の中国語科目では近年、パソコンで（学生各自のペースで）教科書に沿った練習に取り組むことと、従来型の授業とを組み合わせることによって、顕著な効果をあげている、という報告がなされた。4択、並べ替えなど、ゲーム感覚の課題によって、音声や文法等の把握に導く装置は魅力的で、教科書以外の教材を考える上で示唆に富む報告であった。この講演は公開とし、本共同研究のメンバー以外の教員も加えて、研究交流を行った。



講演記録を一読すれば分かるように、早稲田大学文学部における成功例は、単にコンピュータを導入したゆえに成功した、というわけではない。導入されたコンピュータによる学習システムが、記憶のしくみに関する認知科学などの実証的な検証に基づいたものであることで、効果を発揮している。認知科学に基づく学習法については、市川伸一（2000）など学生向けの啓蒙書が出版されており、また言語学習に特定しても、白井恭弘（2004/2008）を代表的な例として、有効な学習法が提唱されている。

第二言語習得研究の専門家である白井によれば、現在の研究では、インプット重視の教授法、中でも「聴覚優先教授法」が圧倒的に効果が高いとされているという。リスニング能力の向上は、話す・読む・書く力にも転移するので、聴解優先のインプットがまず優先されるべきである、というのがその説くところである。

第二言語習得研究の結果わかってきた重要なことは、外国語のメッセージを理解する、すなわちインプットが、言語習得をすすめる上での必要条件だということです。（中略）インプットによって第二言語の音声、語彙、文法の自然な習得がすすむのです。形式的正しさよりも、メッセージの意味を理解することを重視した学習が重要だということです。

白井（2008：134-135）

実際に話せるようになるためには、インプットに加えてアウトプットが必要である。実際に話さなくとも、頭の中で「リハーサル」することで、言語習得のスピードは上がる。しかしやはり必須の前提となるのは、十分なインプットである、という。

このインプット重視の中国語教育を達成しているのが、早稲田大学文学部における、コンピュータを用いた学習法である。講演で詳しく紹介されている通り、学生はパソコンを用いて、90分の授業中に何百回と音声聞き（インプット）、練習問題に解答するための入力をくり返す（アウトプット）。パソコンを用いない通常の授業では、CD等音声教材を用いるにせよ、主にネイティブ教員が発音をくり返すにせよ、学生が集中してリスニングする機会が多いとはいえない。それが、パソコンを用いることで、インプットの回数を飛躍的に増やすことができる。また、大量の設問に対し瞬時に解答することが、アウトプットの機会となっている。このアウトプットに向けてより集中したインプットが行われることになる。

講演と照らし合わせて第二言語習得に関する研究を見ていくと、早稲田大学文学で行われているような、科学的に効果的だと検証された学習法を、いかにして本学の中国語初年次教育に組み込んでいくかが、今後の大きな課題であると考えられる。

しかし、コンピュータ学習を導入するためには、カリキュラム開発などにおける教員の貢献のみならず、大学に対しては機器の導入など金銭的に大きな負担がかかる。楊教授の講演では、スマートフォンを用いたより簡易な方法の開発に言及しているが、恐らく実現までにはまだしばらく時間がかかるであろう。限られた機材を用いて、インプットを中心とした言語教育を実践する方法を考案する必要がある。

本学法学部で英語教育を担当し、第二言語習得研究の実証的な研究を進めている門田修平教授は、門田（2007/2012）などで、科学的に検証された有効な学習法として、「シャドーイング」と「音読」を挙げている。認知心理学や神経科学など、隣接分野の成果も参照した研究で推奨されているのは、「シャドーイング」と「音読」であり、両者には以下の効果が見られるという。

- (1) 耳からの音声インプットをもとに、または眼からの視覚インプットをもとに、その言語インプットの音韻表象を自動的に脳内に形成できる。
- (2) 第二言語における復唱スピードをあげ、その結果、長期記憶への転送に必要な、ワーキングメモリ内の内語反復（サブボーカルリハーサル）の効率化を達成できる。

門田（2012：135）

楊達教授の講演で紹介されたコンピュータ学習と対応させると、(1) はシャドーイングにより、脳内に音声イメージを作り上げる、ということであり、(2) は音読（スピードを上げたリーディング）により、リハーサル効果を持たせて長期記憶へと送り込む、ということである。

門田教授の提唱する学習法を、本学の中国語教育もわずかながら取り入れている。本共同研究のメンバーの一人である大東は、2012年度から、中国語Ⅰ～Ⅳを修了した3年次生以上対象の中級クラスにおいて、「シャドーイング」を用いた学習を実験している。その際に利用しているのは、長谷川正時（2009）『初級からのシャドウイング 中国語短文会話600』（コマガタ出版部）である。長谷川氏は『通訳メソッドを応用した 中国語短文会話800』（スリーエーネットワーク）など、計7冊のシャドーイングを用いた中国語学習書を刊行している。また中国語友の会編（2009）所収の「同時通訳」では、同時通訳となるためのトレーニングを授業でどのように行っているかの実践報告を行っている。これらを参照しつつ、中級のクラスで、シャドーイングと音読（速読）を中心とした授業を試みている。また中国語Ⅰ～Ⅳの授業でも、毎回シャドーイングの時間を設けている。

中級を受講する学生は、毎回対話を10セット（セリフの数は20）暗記してくるよう求められる。授業中にペアを組み、相手の言う日本語のセリフを中国語に置き換えて発音する作業を、90秒もしくは2分間など時間を区切って行い、ペア同士で競争してもらう。つまり授業までに、CDの音声を何度も聞いてくる必要があり、また授業中も、テキストを見ることなく音声だけを頼りにシャドーイングを行う。その結果、中国語の音声を表記したピン音を目で追って読むのではなく、中国語を音声として認識し、記憶した音声を再現することに力点を移そうという試みである。

中国語検定受験を念頭に置いたこの授業では、検定試験の過去問などを解いてもらうが、設問はリスニング問題中心である。リスニングを複数回くり返すのみならず、リスニング教材をスピードを出して音読する作業を行う。その後時間を区切り、教材の文をどれだけの量発音できたかを、これもペア同士で競争してもらう。リスニングによるインプットを多くし、日本語を中国語に置き換えることや音読でリハーサルの代替を行う、という狙いである。これらの結果についてはまだ分析する段階に達していないが、学生の発音、中でも声調が以前に比べ改善されてくるのを感じる。

インプットを多くする方法として、「多聴」と並んで「多読」がある。やさしい原書を、辞書などを引かずに、量的な達成を目指して読む「多読」は、酒井邦秀（2002）などによって広く知られることになり、英語学習においては普及してきた。しかし後発の中国語教育ではまだ適当な教材がなく、今後の開発が待たれる

楊達教授の講演は、第二外国語習得に関する最新の研究成果にもとづき、早稲田大学文学部で行われている中国語教育の方法の意味を、自ら分析するもので、単にコンピュータによる学習を紹介するものではない。楊教授は謙遜して、採用したコンピュータ学習のメソッドがたまたま最

新の第二外国語習得の方法と適合していた、と述べるが、それまでの豊かな教学や教材開発の経験がメソッド開発に生かされているからこそその成果であろう。その成果は、以上のように、英語教育を中心に深化しつつある第二言語習得に関する研究において確認できるもので、本学においても部分的ながら応用が可能である。

本共同研究がこの講演から、今後の本学の中国語初年次教育に対し、多大な啓発を受けたことを記して感謝したい。

## おわりに

本共同研究では、研究助成を利用して、新たな教材である『いつでも中国語—随时随地学汉语—』を開発する際の語彙の選定など、より充実したものとすることができた。また楊達氏の講演によって、新しい教授法の可能性を考えることができた。講演記録に紙幅の多くを割いたが、今後本学でこのようなコンピュータによる中国語教育を含め、新たな教育手段をどのように導入するかについて検討するための、重要な参考資料として掲載するもので、寛恕されたい。

## 参考文献

- 市川伸一 (2000) 『勉強法が変わる本 心理学からのアドバイス』 岩波書店  
大谷泰照他 (2004) 『世界の外国語教育政策 日本の外国語教育の再構築にむけて』 東信堂  
門田修平 (2007) 『シャドーイングと音読の科学』 コスモビア  
門田修平 (2012) 『シャドーイング・音読と英語習得の科学』 コスモビア  
門田修平・氏木道人・野呂忠司 (2010) 『英語リーディング指導ハンドブック』 大修館書店  
胡玉華 (2009) 『中国語教育とコミュニケーション能力の育成 「わかる」中国語から「できる」中国語へ』 東方書店  
興水優 (2005) 『中国語の教え方・学び方 中国語科教育法概説』 日本大学文理学部  
酒井邦秀 (2002) 『快読100万語! パーパパーバックへの道』 筑摩書房 (ちくま学芸文庫)  
白井恭弘 (2004) 『外国語学習に成功する人、しない人 第二言語習得論への招待』 岩波書店  
白井恭弘 (2008) 『外国語学習の科学 第二言語習得論とは何か』 岩波書店  
鈴木寿一・門田修平 (2012) 『英語音読指導ハンドブック フォニックスからシャドーイングまで』 大修館書店  
高瀬敦子 (2010) 『英語多読・多聴指導マニュアル』 大修館書店  
中国語友の会編 (2009) 『中国語プロへの挑戦 翻訳家・通訳になるために』 大修館書店  
HSK 日本実施委員会 <http://www.hskjp/>  
日本中国語検定協会 <http://www.chuken.gr.jp/>